

山梨県南アルプス市

Murakita Dai-2

村北第2遺跡

店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2004. 3

南アルプス市教育委員会

山梨県南アルプス市

Murakita Dai-2

村北第2遺跡

店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2004. 3

南アルプス市教育委員会

例　　言

- 1 本書は山梨県南アルプス市鏡中条地内に所在する「村北第2遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は店舗（ガソリンスタンド）建設に伴うものである。
- 3 調査は平成14年9月9日から平成14年9月26日にかけて行ない、実質調査日数は12.5日であった。
- 4 調査範囲は、開発計画地内の内、施工において「山梨県埋蔵文化財事務取扱い要項」に規定される保護層を確保できない約55m²としたが、後述するように調査上の必要から、原作者と協議の上、調査区を10.13m²拡張したため、最終的な実質掘削面積は、65.13m²となった。
- 5 発掘調査は平成14年度に若草町教育委員会が主体となって行ない、田中大輔（若草町教育委員会社会教育課社会教育係）が担当した。
- 6 発掘調査に従事したのは以下の方々である。

飯室めぐみ・山本　愛・山本妙子（敬称略・50音順）
- 7 整理作業及び報告書執筆・刊行については、平成15年4月1日に若草町が周辺5町村と合併し「南アルプス市」となったため、若草町からこれを引き継ぎ、引き続き田中（平成15年より南アルプス市教育委員会生涯学習課文化財担当）が担当した。
- 8 整理作業は平成15年度に行ない、飯室・山本（愛）・石川三枝が参加した。
- 9 本書に掲載した地図は、国土地理院発行1/50000「甲府」「駿沢」、若草町役場発行1/10000「若草町全図」及び若草町役場発行1/2500「都市計画図」である。
- 10 発掘調査・整理作業に際しては、以下の諸氏・諸機関にご教示、ご協力を賜った。記して謝意を表する次第である。

網倉邦生・大島正之・荻野孝・佐々木満・畠　大介・神山梨文化財研究所（敬称略・50音順）
- 11 本書に関わる出土遺物ならびに写真・記録図面類は南アルプス市教育委員会において保管している。

凡　　例

遺構凡例

- 1 遺構の縮尺は、調査区全体測量図1/80、堅穴住居址（S I）1/40、竪1/20、土坑（S K）1/20・1/40とした。
- 2 遺構断面図中の「270.5」等の数値は標高を表し、単位はメートルである。また同一遺構挿図中の水系レベルは統一した。
- 3 挿図中の北方位はすべて国家座標に基づく真北である。磁北は $6^{\circ} 10'$ 西偏する。
- 4 遺構断面図において、基本土層はスクリーントーンで示したが、煩雑になる場合は省略した。これ以外に用いたスクリーントーン、ドットマークの凡例は、各々使用された挿図中に示した。
- 5 本書においては、便宜上遺構名称に以下に示すような略称を用いた。分類基準は以下のとおり。

S I 堅穴住居址

P ピット（堅穴住居址等の遺構に伴う坑）

S K 土坑（土に穿たれた穴で上記以外のもの）

- 6 遺構の番号は、発掘調査時に遺構種別ごとに確認順に付したものを作成したため、その所属時期、位置とは無関係である。遺構番号を変更することによる整理調査時のミステイク、報告後の遺構原図・遺物の検索難を避けるため、あえて番号の並べ替え等は行わず、発掘調査時に最初に付した遺構番号を用いた。また S K の中で遺物が検出されなかったものについては、発掘調査時に遺構番号を付さなかつたものがある。そうしたものについては、整理調査時に適宜遺構番号を付した。

遺物凡例

- 1 遺物の縮尺は土器・灰釉陶器1/3、銅鏡1/1・1/2で示した。
- 2 図示した遺物は、遺構平／断面図中に遺物番号をもって出土位置を示した。遺物挿図中に図示してあるのに遺構平／断面図中に図示されていないものは遺構一括で取り上げた遺物である。
- 3 土器等回転体に近い遺物の実測に際しては四分割法を用い、遺物の右前半1/4を切り取った状態で作図し、左側1/2に外面、右側1/2に断面及び内面を記録した。また、残存状況によっては遺物の中心を算出し、 180° 回転して作図したが、この場合は中心線を一点鎖線で示した。また断面等を任意の回転で付した場合は点線で示した。
- 4 回転体にならない遺物の実測に際しては三角投影法に準拠した図を示した。また、破片資料であるため推定径の算出不能な土器、及び拓影図に関しても同様の作図に依った。
- 5 灰釉陶器は断面にスクリーントーンを施して、施釉範囲を別のスクリーントーンで示した。
- 6 遺物観察表において括弧で示した計測値は、推定値若しくは残存最大高である。
- 7 遺物の色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修 財團法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帳』に準拠して付与した。
- 8 挿図中の遺物番号と写真図版、遺物観察表中の遺物番号は一致する。

本文目次

例 言

凡 例

目 次

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過.....	1
第1節 調査に至る経緯.....	1
第2節 調査の方法と経過.....	1
(1) 調査の方法.....	1
(2) 調査の経過.....	4
第Ⅱ章 遺跡の立地と環境.....	6
第1節 遺跡の立地.....	6
第2節 調査区の土層.....	9
第Ⅲ章 検出された遺構と遺物.....	10
第1節 壕穴住居址（S I）.....	10
第2節 土坑（SK）.....	12
第Ⅳ章 収束.....	17
第1節 壕穴住居址について.....	17
第2節 土坑墓について.....	17
第3節 その他の土坑について.....	18
第4節 おわりに.....	18
参考引用文献.....	19
図版	
報告書抄録	

挿図目次

第1図 遺跡の位置.....	2
第2図 調査区の位置と配置.....	3
第3図 調査区全体測量図.....	5
第4図 周辺の地形.....	7
第5図 周辺の遺跡.....	8
第6図 調査区の土層.....	9
第7図 S I O 1 / S K 0 6 測量図・S I O 1 出土遺物.....	11
第8図 S I O 1 瓢測量図.....	12
第9図 S K 0 1 測量図・S K 0 1 出土遺物.....	13
第10図 S K 0 2 測量図・S K 0 2 出土遺物.....	14
第11図 S K 0 1・S K 0 2 出土錢.....	14
第12図 S K 0 3～S K 0 5 測量図.....	16

表目次

第1表 出土遺物観察表.....	20
------------------	----

図版目次

図版1 調査区全景（北より）／S I O 1 全景（西より）	
図版2 S I O 1 瓢（西より）／S K 0 1 全景（南より）	
図版3 S K 0 1 遺物出土状況（南より）／S K 0 2 全景（南より）	
図版4 S K 0 1・S K 0 2 遺物（六道錢）／S K 0 1 出土遺物（土器）	
図版5 S K 0 1 出土遺物（歯骨）／S K 0 2 出土遺物（歯骨）	

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

平成14年7月23日、荻野孝（若草町寺部1876-1）より、若草町（現南アルプス市）鏡中条64-1においてガソリンスタンドを建設するに際し、若草町宅地開発及び建物指導要綱第5条に基づく事前協議の申出があった。これに先立ち若草町教育委員会（以下町教委）は、荻野孝より当該計画地における埋蔵文化財の有無について照会を受けた。

町教委は、当該計画地が周知の埋蔵文化財包蔵地内であるので文化財保護法に基づく届出が必要な旨回答した。そこで荻野孝は平成14年8月1日、文化財保護法第57条の2に基づく届出を町教委に提出し、町教委は同日、山梨県教育委員会（以下県教委）にこれを進達した。これを受け平成14年8月8日には、県教育長より荻野孝に着工に際しては発掘調査をする旨通知があった。

荻野孝は平成14年9月2日、町教委に試掘調査を依頼し、町教委は平成14年9月9日、ガソリンタンク埋設部分に対して試掘調査を行った。その結果、古墳時代前期の所産となる土器片や遺構（後述するSK03）が検出されたので、町教委と荻野孝は当該計画の今後の対応について協議した。計画設計書を検討した結果、ガソリンタンク埋設部分以外は基本的に盛土を行い、「山梨県埋蔵文化財事務取扱い要項」に規定される保護層を確保できることから、ガソリンタンク部分約50m³のみを対象として埋蔵文化財の記録保存のため発掘調査を行うことで合意した。そこで後述する日程で発掘調査を行うに至った。

第2節 調査の方法と経過

（1）調査の方法

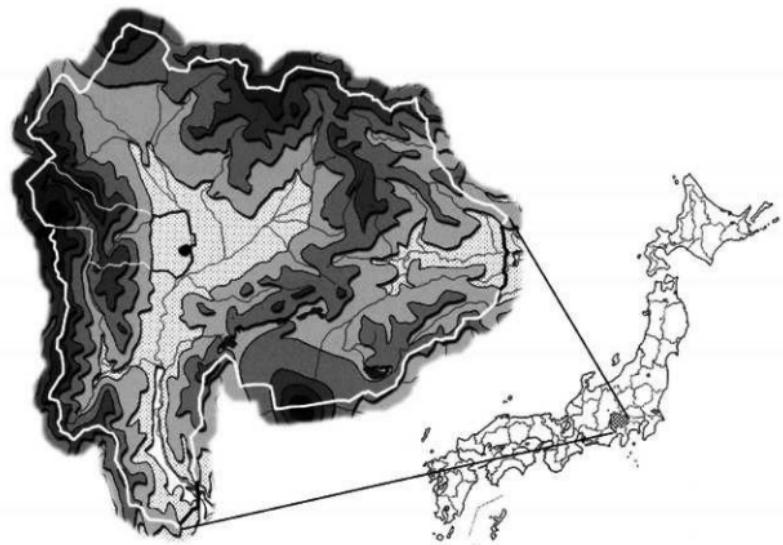
調査に際してはグリッド法を用い、調査予定地をカバーするように5mメッシュを基本とするグリッドを設定した。グリッドの原点には任意の点を用い、5mメッシュの南北線は概ね当初の調査区の南北ラインに沿うように設定した。グリッドの南北ラインは真北より24°00' 東偏する。

調査に用いた水準点は、調査区より直線距離で420メートル程南にある釜無川流域下水道水準点No26(269.367m)より原点を調査区際に移動して設定した。設定した調査水準点の標高は271.292mである。

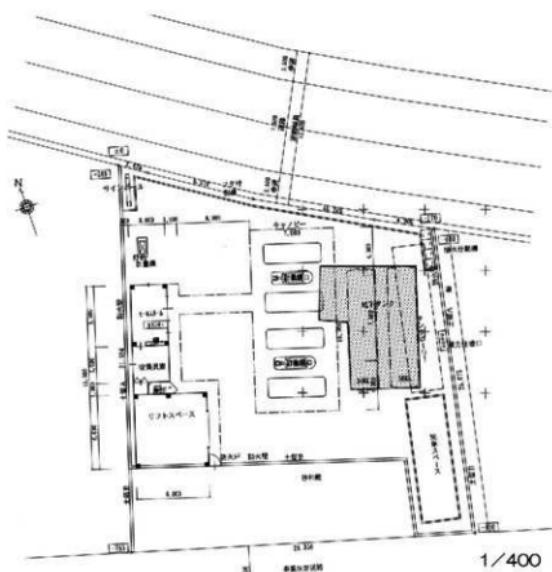
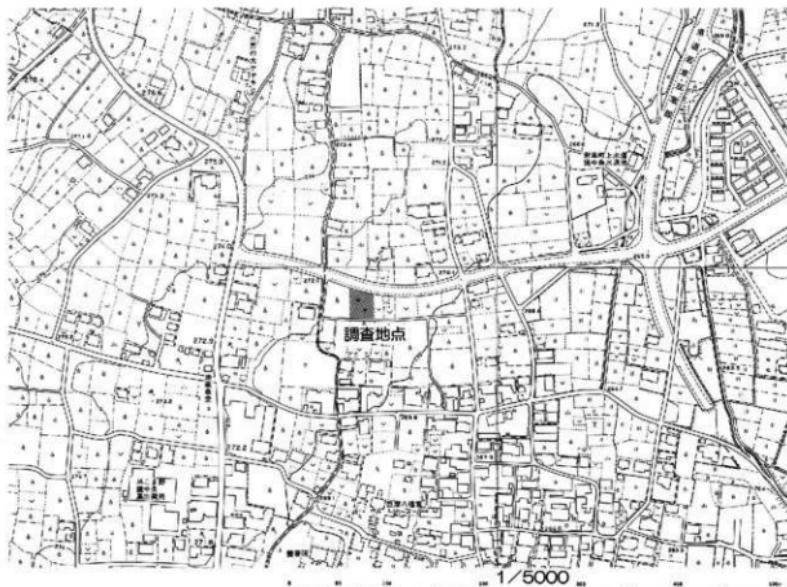
5mメッシュの各線（ライン）の名称は、南北に走る線を東から西にA・B・C・・・とアルファベットで、東西に走る線を北から南に1・2・3・・・と算用数字で表し、それぞれA-ライン、B-ライン、1-ライン、2-ラインなどと呼称した。またそれぞれのラインの交点を（西へ並ぶアルファベット）-（南へ並ぶ算用数字）のように表して、A-1ポイント、B-2ポイントなどと呼称した。各区（スクエア）の名称はその区画の北東隅の名称をもっててあつた。

調査はまず重機により表土を除去した後、人力により確認面を精査し、遺構確認作業を行なった。表土から遺構確認面までの深さは概ね45~50cm程度であった。

堅穴住居址の調査に際しては原則として四分割法を採り、2本の直交するセクションラインを設定、市松模様状に土層観察用のベルトを残して覆土を除去した。土層観察用のベルトは土層断面図を1/20で作成後取り除いた。遺構平面図は平板測量により1/20で作成した。竈については簡易造り方を用いて測量し、平面図／断面図共に1/10で作図した。



第1図 遺跡の位置



第2図 調査区の位置と配置

土坑については覆土を二分割し、まず半分の覆土を除去した。その後、覆土の半裁によって生じた土層断面の観察を行ない、土層断面図を1/10乃至1/20で作成した後完掘した。また、必要に応じてエレベーション図を1/20で作成した。平面図は平板測量によって1/20で作成した。正し、上層の観察、平面図の作成後に土層断面図・エレベーション図の作成を行わず、遺構の出土レベルを記録してこれに替えた場合もある。ただしSK01においては、覆土を4分割し、土層断面を二方向から作成し、遺構平面図（兼遺物出土状況微細図）については簡易造方を用いて1/10で作成している。

（2）調査の経過

調査の経過は以下のとおりである。

9月9日 月曜日（晴）

機材搬入。重機による表土除去作業。

9月10日 火曜日（晴）

午前中に表土除去作業を終了。本日より発掘調査作業員を本格投入。確認面を精査する。

9月11日 水曜日（晴）

確認面精査続行。竪穴住居址、土坑等を検出する。

9月12日 木曜日（晴一時雨）

光波測量機を用いグリッド設定（杭打ち）実施。確認面の精査を続行しながら遺構覆土の除去を開始。

SK04の覆土半裁を完了する。

9月13日 金曜日（晴後曇）

遺構の表土除去作業を続行。竪穴住居址部分について、地権者の同意を得た上で調査区を重機により拡張。住居址の全体像の確認を目指す。光波測量機により、調査の位置図、配置図を作成する。

9月14日 土曜日～9月15日 月曜日

休日・祝日のため休業。

9月17日 火曜日（曇後雨）

調査区拡張部分の確認面を精査。降雨により半日で作業を切り上げる。

9月18日 水曜日（曇後晴）

SI01表土除去作業を続行。SI01プランに内包される形で、入れ子状にSK01・SK02を発見。それぞれに人骨・六道錢の検出を見たことから、これらを土坑墓と断定する。

9月19日 木曜日（晴）

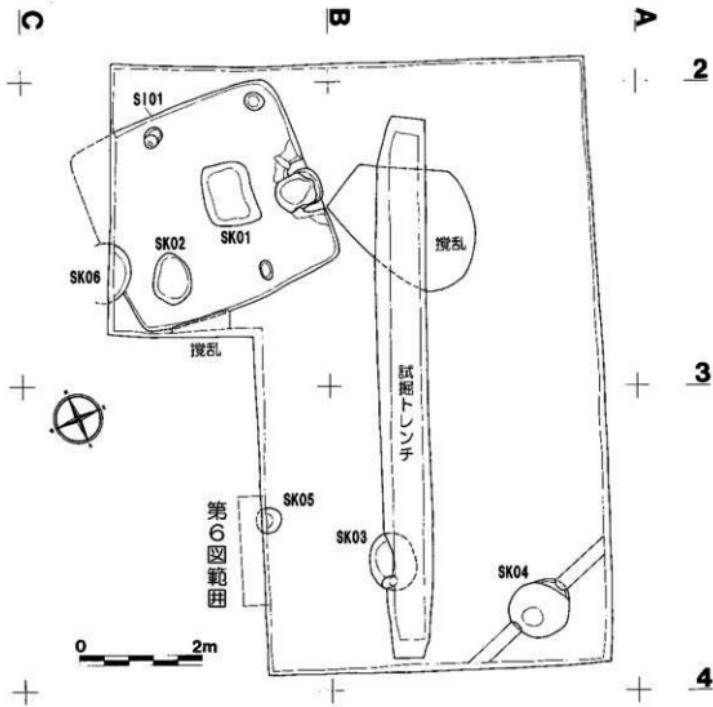
SI01・SK01・SK02の覆土除去作業を継続。同日中にSI01の表土除去作業セクションベルトを除き終了する。

9月20日 金曜日（晴）

SI01・SK01覆土のセクション図を作成。その後セクションベルトを除去し、SI01の検出作業を完了する。SK01及び同遺物出土状況の写真撮影を行う。

9月21日 土曜日（晴後曇）

SI01寫真撮影。SI01及びSK01の平面図を簡易造方で作成。



第3図 調査区全体測量図

9月22日 日曜日～9月23日 月曜日

休日・祝日のため休業

9月24日 火曜日（晴）

SI01・SK02平面図を平板測量により作成。SK03・SK04のセクション図を作成後覆土の除去を完了し、SK03～06の平面図を作成する。

9月25日 水曜日（晴）

全体清掃後SI01・SK02・調査区全景の写真撮影を行う。撮影後SI01竪を切開。竪構築土のセクション図を作成する。調査区壁において基本層序及びSK05のセクション図を作成する。

9月26日 木曜日（晴）

調査区埋戻作業（同日終了）機材等撤収作業。同日現場明渡し。同日中に埋蔵物発見届を小笠原警察署長に提出。同日中に埋蔵文化財保管証及び発掘調査終了報告書を県教育長に提出。

なお、試掘調査時に深堀を実施した結果、今回調査対象とした確認面以下は砂疊層となり、遺構・遺物が検出されなかたため、調査はこの1面のみで終了とした。

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 遺跡の立地

本遺跡は、平成15年4月1日、山梨県の釜無川右岸地域6町村が合併して誕生した南アルプス市に立地する。市の総面積264.06平方km、領域は東西29.6km、南北11.8kmの範囲に広がり、山梨県の総面積の約5.9%を占める。市の領域は甲府盆地における釜無川（富士川）右岸地域のほぼ全てを占めている。これは、概ね山梨県の最西部、所謂峡西（きょうさい）地域、西郡（にしごおり）地方などと呼称されてきた地域に相当し、合併以前より地形的にも文化的にも一体的に捉えられてきた地域といえる。

市域西部は、国内第2位の標高（3192m）を誇る南アルプス連峰（赤石山脈）の主峰北岳を擁し、その前衛である巨摩山地を含め急峻な山岳が卓越する。また、櫛形山を中心とした巨摩山地と南アルプス連峰との間には、所謂「糸魚川一静岡構造線」が市域を縦断している。

市域東半は、これら急峻な山岳を流下してきた河川の営為によって形成された複合扇状地が発達する。その中でも、御動使川の河川作用によって形成された御動使川扇状地は、日本有数の扇状地として著名である。市域の東辺は一部対岸に飛地を有するが、概ね釜無川に画され、これら巨摩山地由來の複合扇状地群が到達し得なかった市域南東辺には、釜無川の氾濫原がひろがっている。

今回の調査地点は、第5図に（1）として示した（以下遺跡名のあとに付した番号は第5図に示した遺跡の位置に対応する）。村北第2遺跡は、御動使川扇状地の南東端に位置し、その領域は東西約300m、南北約500mに及ぶ。遺跡領域内においては古墳時代前期以降中世までの濃密な遺物散布が認められ、領域の北端には、樹齢千年に及ぶと云われる国指定天然記念物「三恵の大ケヤキ」が枝を伸ばす。

本遺跡域を含め、御動使川扇状地の末端部では、扇端に沿って帶状に埋蔵文化財包蔵地が分布することが知られている。御動使川扇状地の最末端では古墳時代後期・奈良平安時代を中心とする集落に伴って腰帶具などが検出された新居道下遺跡（10）、弥生時代中期・後期及び古墳時代後期～中世に係る遺構・遺物が検出された溝呂木道上第5遺跡第I地点・第II地点（14・15）、枇杷B遺跡（13）、溝呂木道上第5遺跡から滝沢川を隔て南側に占地する向第1遺跡（16）などの調査が行われている。これら遺跡群の調査成果からは、弥生時代中期以降中世まで、連綿と人間の営為の痕跡が確認されており、扇状地末端部の湧水帯に支えられた豊かな住環境を想像することが出来る。

御動使川扇状地のやや内側（扇央）に入ると古墳時代前期及び平安時代の集落が発見された村前東A遺跡（5）、角力場第2遺跡（6）、寺部村附第12・6遺跡（8・9）、同じく古墳時代前期の遺構が検出された前原G遺跡（7）・豊小学校遺跡（3）があり、この辺りに古墳時代前期の遺構が濃密且つ広汎に分布することが明らかになりつつある。特に村前東A遺跡からは、100軒を超える該期住居址が検出されており、古墳時代前期の拠点的集落として注目される。村前東A遺跡の北側には弥生時代後期の方形周溝墓群が検出された十五所遺跡（4）が占地する。また、寺部村附第6遺跡（9）からは、古墳時代中期の円形周溝墓が3基検出されており、甲府盆地西部地域の古墳時代の動向を探る上で注目される。

遺跡の滝沢川を隔てた南側に展開する滝沢川扇状地上の微高地には、古代末から中世にかけてこの地で勢力を持った加賀美氏の館跡と伝えられる古刹「法善寺」がある。また、古代末から近世の水田址と



凡例：

河道
旧河道

御動使川扇状地及び
市之瀬台地盤複合扇状地

釜無川氾濫原

汛原上や
扇状地上の微高地

滝沢川扇状地

第4図 周辺の地形



第5図 周辺の遺跡

共に法善寺の塔頭であった「福寿院」関連の遺構が検出された二本柳遺跡（11～12）が調査されている。二本柳遺跡では特に、甲西バイパス地点（12）から中世の木棺が良好な状況で検出され、当時の葬送儀礼を検証する上で貴重な事例となった。滝沢川扇状地上には、この法善寺及びこれら遺跡を中心として条里型地割が広く遺存しており、現在でも中世的空間を色濃く残す町並みが認められる。

この他、滝沢川扇状地上では、扇状地上の微高地を中心に発掘調査が実施され、住吉遺跡（21）において弥生時代後期の住居址が検出されているほか、弥生時代中後期の小区画水田が検出された向河原遺跡（17）を始めとして油山遺跡（18）、中川田遺跡（19）、大師東丹保遺跡（20）などで原始、古代の水田址や祭祀跡が検出されている。また、大師東丹保遺跡からは洪水堆積物に埋没した古墳が壺型埴輪を作って検出され注目を集めた。

この他に近年、御動使川・滝沢川扇状地及び沖積低地において油田遺跡を中心に溝占木道上第5遺跡、村前東A遺跡等をはじめとして、広汎な領域で縄文最終末から弥生中期前半の遺物が出土しており、台地上から扇状地末端乃至沖積低地への進出という、稻作の開始と連動した遺跡の動態を探る上で今後調査事例の蓄積が期待される。また、これまで遺構の存在が確認されていなかった、釜無川の氾濫原において、御崎蔵入遺跡（22）の調査が行われ、平安時代の祭祀跡と共に近世の道状遺構や小橋、水田址等が洪水堆積物に被覆され、良好な状況で検出された。今後これまで遺跡の存在が認められていなかったこれら地域から新たな遺跡が発見される余地があり、注意を要する。なお、この釜無川氾濫原においては、近世釜無川右岸の治水の要衝であった堤防遺跡「将監堤」（23）の調査も実施され、この地域における治水体系の一端も明らかになっている。

第2節 調査区の土層

遺跡の現況は桃畑であった。調査区において確認された基本土層は以下のとおりである。

第I層 暗褐色土層。しまり無く砂礫を多く含有する。

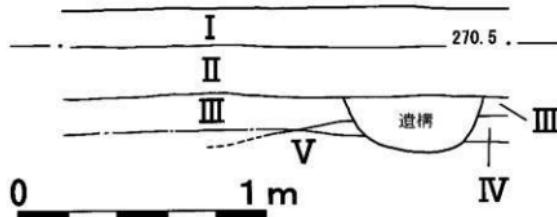
第II層 暗褐色土層。縮まりがあり砂礫を含有する。I・II層とも近年までの搅乱土層と推察される。

第III層 黄褐色粘土層。調査区南半から出現し、調査区南端にむかひ層厚を増す。

第IV層 黄褐色土と砂礫の混和層（第III層から第V層への漸移層）

第V層 砂礫層。

調査区北半においては、第IV層上面が、調査区南半においては第III層上面がそれぞれ遺構確認面となつたが、今回の調査における実際の遺構確認作業は、これより若干深度を下げ、第IV層中乃至第III層中で行なつた。



第6図 調査区の土層

第三章 検出された遺構と遺物

第1節 竪穴住居址（S1）

S101

B-2区において検出された。SK01、SK02、SK06および現代の搅乱に切られる。当初調査区西壁付近で本址竪付近が検出されたため、地権者の合意を得る中で、本址完掘を目指し調査区を西側に10m程拡張した。しかしながら、本址北西コーナー付近は検出に至らず、本址の全容を明らかにすることは出来なかった。

本址の形状はやや不整な方形を呈し、規模は確認面において南北3.52m、東西3.48mを測る。主軸はN-93°-Eを採る。床面での規模は南北3.52m、東西3.32mとなり、周壁は61~75°程の角度を持つ直線的に開きながら立ち上がる。

床面は、本址を切るSK01、SK02によって一部破壊される。床面には貼床を施したような痕跡は認められない。確認面から床面までの深さは、最大で0.19m、床面の標高は270.18m程になる。床面は全体に硬化し、特に竪周辺で顕著な硬化面が確認できる。

住居址の覆土については自然堆積で4層に分けられる。

周溝や明確な柱穴は確認できないが、床面においてピットを3基検出した（P-1～3）。P-1は、形状円形を呈し、規模は長径短径共に0.30mを測る。床面からの深さは0.06m、底面標高は270.12mを測る。P-2は、形状椭円形を呈し、規模は長径0.32m、短径0.20mを測る。床面からの深さは0.06m、底面標高は270.17mを測る。P-3は、底面に段差を有す。2基のピットが切り合っている可能性があるが、形状椭円形を呈し、規模は長径0.37m、短径0.26mを測る。床面からの深さは上段で0.07m、最深部で0.09m、最深部の底面標高は270.10mを測る。各ピットの底面において、顕著な硬化面等は確認できない。

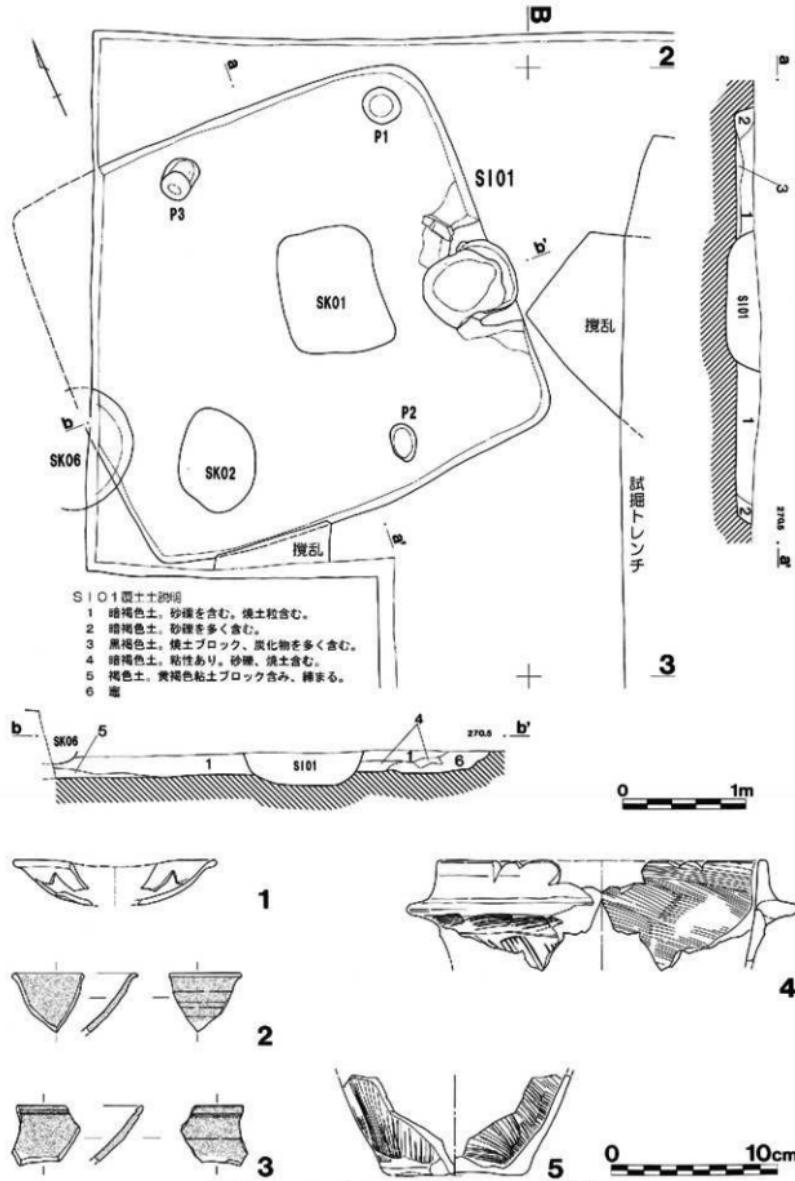
竪は本址東壁や南寄りに1基構築される。竪は両袖、火床が残り遺存状態は良好である。内壁、火床、周壁には赤変した顕著な被熱層が観察される。火床の規模は東西0.50m、南北0.57mを測る。火床から検出された煙道端までの長さは0.76m、両袖間の最大幅は1.04mを測る。

袖は黄褐色粘土で構築され、芯には一部礫が用いられる。竪平面図に明示することは出来なかったが、断面図には検出された袖石を見通して作図し、破線で加筆した。

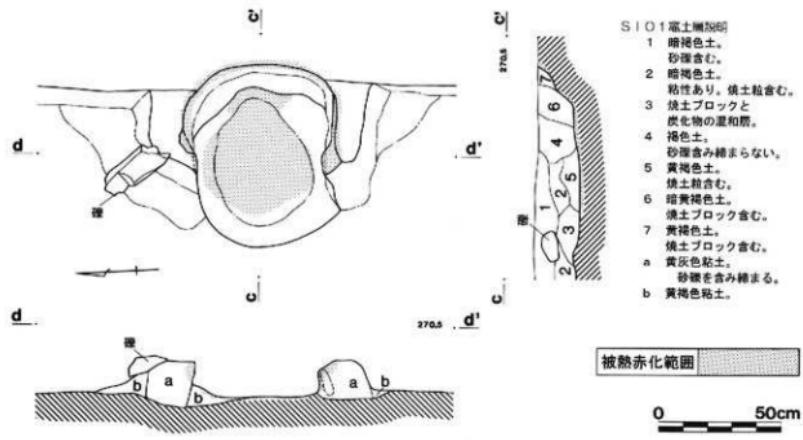
竪左袖外側には、床面との比高最大4cm程のなだらかな台状の高まりが確認できる。また、竪左袖には、被熱し赤化し脆くなった礫が立てかけられたような状況で検出された。

本址の覆土からは、平安時代前半の所産となる土器を主体としながら、混入した弥生時代後期～古墳時代前期、古墳時代後期、奈良時代の遺物片を確認することができる。覆土出土の遺物はすべてが小片で遺存状態も悪く、第7図に遺物番号1～3の土師器皿、灰釉陶器碗、及び遺物番号5とした土師器皿を図示したほかに図示し得る遺物は認められなかった。

図示した遺物のうち、遺物番号4として示した土師器羽釜は、本址竪際床面に遺棄された状態で検出された。この他、床面における遺物の検出はなかった。



第7図 S101/SK06測量図・S101出土遺物



第8図 S I O 1 墓測量図

第2節 土坑 (SK)

SK 0 1

B-2区において検出され、S I O 1を切る。隅の丸いやや不整な長方形を呈する。長径を軸とした場合、遺構の主軸はN-12°-Eをとる。確認し得た規模は、S I O 1床面において南北1.05m、東西0.86mを測る。確認し得た深さは、遺構確認面から0.28m、S I O 1床面からは0.12m、底面標高は270.08mである。覆土は3層に分けられる。焼上の集中層は検出されていない。

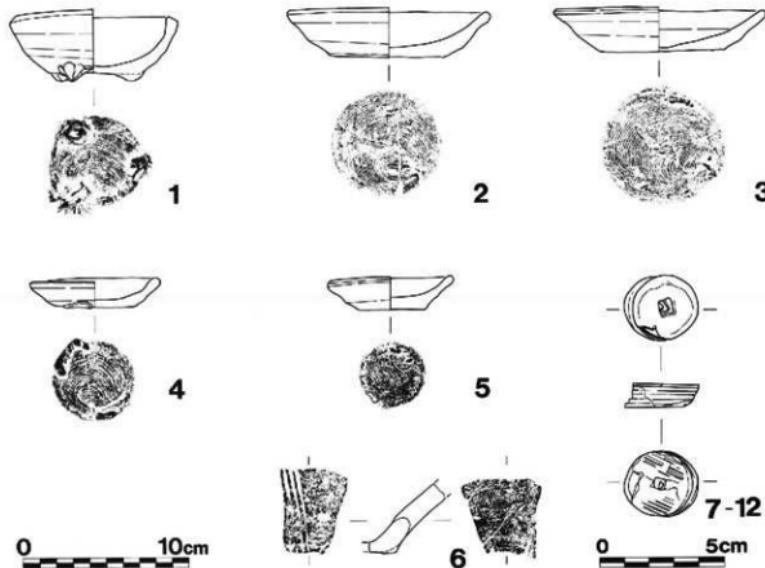
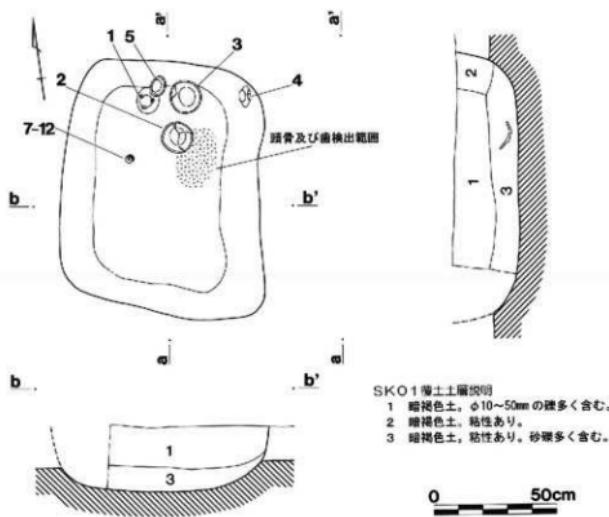
本址内中央からやや北東よりの地点で頭骨と思しき骨片が歯列を伴って検出された。他にも本址内からは、骨片がいくつか検出されたが、覆土中の溶解、細片化が激しく非常に脆弱であり、形をもって取上げることが出来なかった。頭骨歯列が、遺構の北東四半分から検出されたことから東向き北頭側臥で、土坑の規模から屈葬であったことが推察される。

本址北半に集中して、土師質土器香炉、相対的に大型の土師質土器皿2枚、相対的に小型の土師質土器皿2枚がセットをなすように検出された。1の香炉は底面からやや浮いた状態で逆位で、2の皿は底面から若干浮いた状態で正位で、3の皿は底面に器体底部の一部が接するように正位で、4の皿は周壁に接して逆位で、5の皿は1の香炉の上に接して正位でそれぞれ検出された。また、7の土師質土器擂鉢は覆土からの検出である。

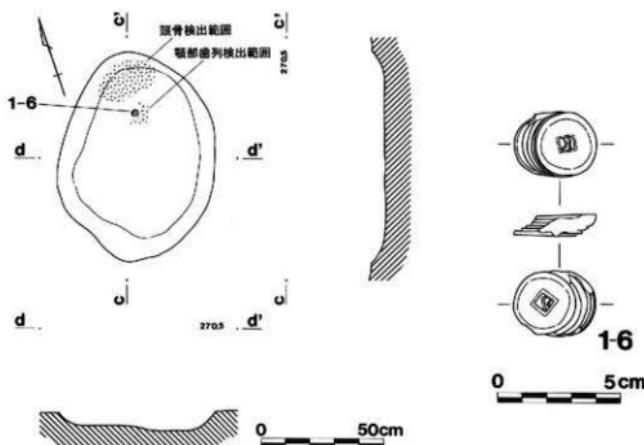
この他、本址中ほどやや西よりで6枚全てが癒着した状態の六道錢を検出した。出土した銅錢の銭種は7が元豊通寶である他は商食が進み判別し難いが、X線による判読の結果、9・12は開元通寶と判明した。また、同様に8は祥符元寶、10は元祐通寶、11は天禧通寶である可能性が高いことが判明した。なお12には龍乃至蓮状の圧痕が認められる。

SK 0 2

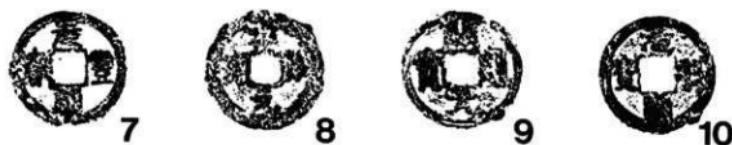
B-2区において検出され、S I O 1を切る。不整な梢円形を呈する。長径を軸とした場合、遺構の



第9図 SKO 1測量図・SKO 1出土遺物



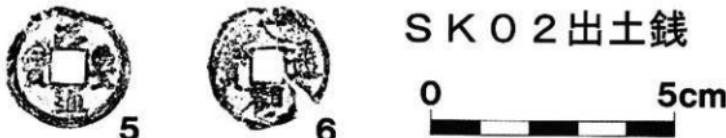
第10図 SK 02測量図・SK 02出土遺物



SK 01出土銭



SK 02出土銭



第11図 SK 01・SK 02出土銭

主軸はN-10°-E程をとるものと思われる。確認し得た規模は、S I 0 1床面において南北0.85m、東西0.66mを測る。確認し得た深さは、S I 0 1床面からは0.08m、底面標高は270.08mである。覆土から焼土の集中層は検出できなかった。

本址北端において、非常に脆弱で、遺存状態が悪いながら頭骨と思しき骨片を検出した。頭骨と歯列の位置関係から、東向き北頭側臥で、土坑の規模から畠葬であったことが推察される。

また、歯列に取り囲まれるような状態で6枚全てが着した六道銭を検出した。歯列の一部は六道銭に起因する酸化銅により緑変していた。出土した銅銭の銘種の内訳は、「永樂通寶」4枚(1~4)、元豐通寶1枚(5)、大觀通寶1枚(6)である。いずれも背面は無文である。

この他に本址から遺物を検出することは出来なかった。

S K 0 3

A-3区において切り合ひなく単独で検出された。試掘調査時に本址東側半分をトレンチの掘削によって壊したため明確な規模は明らかに出来ないが、形状は円形乃至梢円形を呈するものと推察される。

本址内南端部にピット状の窪みが確認できる。

確認面から底面までの深さは0.40m、底面標高は269.82mを測る。付属するピット状の窪みについては確認面からの深さ0.46m、底面標高269.76mを測る。本址覆土は暗褐色土を主体として4層に分けられる。上記したピット状の窪みを埋める覆土第3層は炭化材を夥しく含む。

本址からは平安時代前半以降の所産となる土器片が僅かに検出されたが小片のため図示し得なかった。

S K 0 4

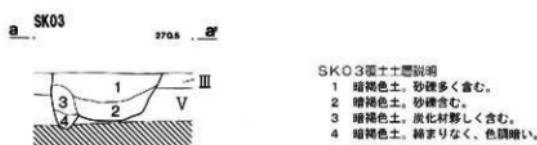
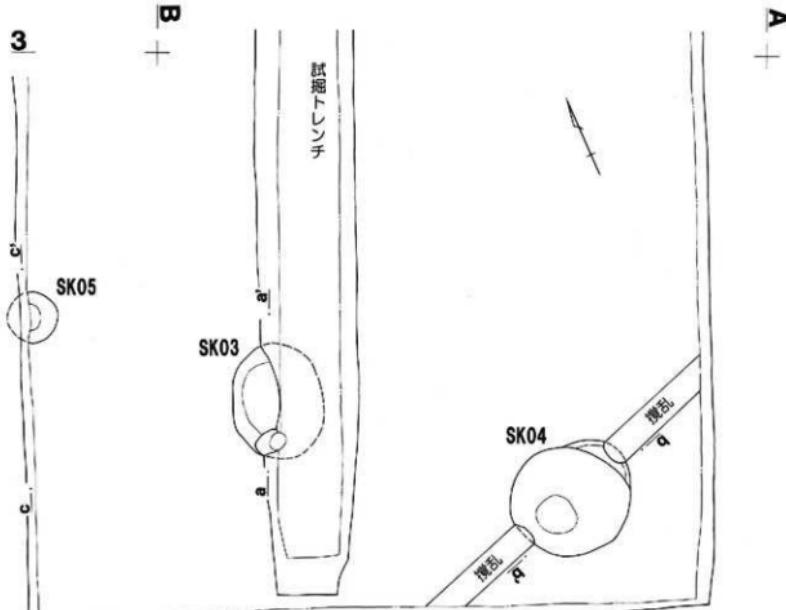
A-3区において検出された。本址中心を貫くように確認面からの深さ0.03~0.05m程の搅乱に切られる他は、切り合ひ無く単独で検出された。長径0.98m、短径0.90m程のやや不整な円形を呈するが、西側に確認面からの深さ0.04m程の浅い掘り込みが付属する。覆土断面の観察によれば、この浅い掘り込みが本址本体に切られることから、この部分が本址に切られる別の遺構であった可能性も指摘できる。本址の底面は遺構中心からやや西偏しており、確認面から底面までの深さは0.34m、底面標高は269.81mを測る。覆土は黒褐色土を主体として3層に分けられる。本址から遺物は検出されなかった。

S K 0 5

B-3区において検出された。遺構の西半分が調査区外にあるため、遺構の規模形状を明らかにすることは出来ないが、円形乃至梢円形を呈するものと推察される。検出し得た範囲においては切り合ひなく単独で存在する。確認面からの深さは、0.04m程だが、調査区壁において、遺構の立ち上がりが追える基本層第3層上面からの深さは0.23mを測り、遺構の底面標高は270.06mである。覆土は暗褐色土を主体として2層に分けられる。本址から遺物は検出されなかった。

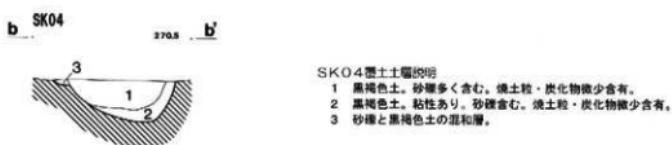
S K 0 6

B-2区において検出された。遺構の西半分が調査区外にあるため、遺構の規模形状を明らかにすることは出来ないが、円形乃至梢円形を呈するものと推察される。検出し得た範囲における切り合ひ関係からはS I 0 1を切ることが確認できる。確認面からの深さは0.04m、底面標高は270.28mを測る。本址から遺物は検出されなかった。



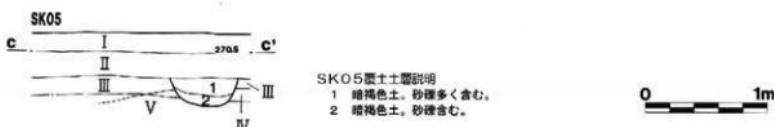
SK03 地質土層説明

- 暗褐色土。砂礫多く含む。
- 暗褐色土。砂礫含む。
- 暗褐色土。炭化材夥しく含む。
- 暗褐色土。結まりなく、色調暗い。



SK04 地質土層説明

- 黒褐色土。砂礫多く含む。燒土粒・炭化物微少含有。
- 黒褐色土。粘性あり。砂礫含む。燒土粒・炭化物微少含有。
- 砂礫と黒褐色土の混和層。



第12図 SK03～SK05測量図

第IV章 収束

第1節 竪穴住居址について

今回の調査において検出された竪穴住居址（S I 0 1）については、上記したとおり覆土中より広範な時期の遺物が検出されているが、検出遺物の主体は平安時代前半の所産となる所謂甲斐型土器である。本址においては遺物の出土片数、出土遺物自体の残存率共に低く、数少ない小片の遺物によって遺構の時期を検討せざるを得ない。第7図に図示した遺物の内、1～3及び5は、遺構覆土からの出土である。4は竈右袖脇の床面において検出された。上の状況から、本址の時期は、所謂甲斐型土器を伴う時期の中でも羽釜の出現期以降の所産といえ、山梨県史奈良・平安時代編年（山下・瀬田）のVI期の範疇で捉え得るものと考えられる。覆土中の遺物の有り様もこれに矛盾せず、本址は概ね10世紀前半の所産とすることができる。

第2節 土坑墓について

今回検出された、土坑墓2基のうち、SK 0 1については、人骨、六道鏡と共に、遺構北側に集中して土師質上器5個体がセットで検出された。セットの内容は、香炉1個体（遺物番号1）、相対的に大型の皿2個体（遺物番号2・3）、相対的に小型の皿（遺物番号4・5）である。検出されたこれら上器の形態的特徴は同じ南アルプス市（旧若草町域）に所在する二本柳遺跡（新津ほか1992）において検出された土師質土器群のそれに酷似しており、SK 0 1の大型、小型皿の法量は、二本柳遺跡において「大」、「中」、「小」に3分類された法量分布の「大」、「小」にそれぞれ対応する。また同様に並崎市大輪寺東遺跡（新津ほか1990）の出土土師質上器分類におけるIII類の範疇で捉え得るものと考えられる。二本柳遺跡の土師質土器群、及び大輪寺東遺跡III類土器群は、発掘調査報告書によれば、いずれも伴出する灰釉陶器丸皿、出土鏡、鉄軸小壺、鉄砲工等の供伴遺物等から16世紀後半の所産とされるが、これら資料を用い編年（降矢ほか2001）を組まれた佐々木満氏のご教示によれば、SK 0 1出土のこれら土師質土器群は、16世紀中ごろの範疇でとらえ得るという。従って本址の時期も同様に捉えることができよう。

なお、野代幸和氏は、山梨県の中近世墓の検出例を集成し、その形態から墓制の変遷過程を提示しているが（野代2000）、それによれば、隅丸長方形のプランを採る土坑墓は、野代氏が第Ⅱ期とした15世紀から17世紀に盛行する傾向が認められるといい、本遺跡でのあり方と一致する。

また、大輪寺東遺跡からは、本址と同様の形態を呈す墓坑（第2号墓坑）が検出されており類例としてあげられる。この墓坑は、隅丸長方形のプランを呈し、遺構の北側に集中して5個体の土器が検出され、六道鏡を伴った人骨（歯列）が遺構北半東側に集中して検出されており、大輪寺東例が、遺構北端に炭化粒子の集中散布がみられること、検出された5個体の土器の組成が相対的に大型の皿2個体、小型の皿3個体となっており、本遺跡の組成とは小型の皿1個体と香炉が入れ替わっていることを除けば、今回の調査で検出されたSK 0 1と非常に酷似した検出状況を呈す。また、遺構の時期もほぼ同様であり、中世の葬送儀礼の一形態を示す資料として提示できる。なお、SK 0 2については、出土遺物に恵まれずその時期的位置付けを明確にすることは出来ないが、検出されたその形態や周辺の遺物の出土状況に鑑みれば、近接するSK 0 1とさほど時期差ないものと推察して差し支えないように思われる。

第3節 その他の土坑について

その他に検出された土坑4基については、時期を決定するに足る伴出遺物に恵まれず、その時期を明示することは出来ない。ただし、SK06については、SI01を切って構築されていることから、10世紀前半以降の所産とすることができます。

なお、SK03から05は、N-135°-E程の軸をとってほぼ等間隔に並ぶことから、掘建柱建物址、柵列を構成するピットである可能性も指摘できるが、SK04については、他の2基と覆土の主体となる土層の出自が異なっている。

第4節 おわりに

南アルプス市（旧若草町）の遺跡台帳によれば、本遺跡域からは平安時代を中心としながら、弥生時代後期から中世に至る広範な時期の遺物散布が確認されている。今回の調査でも、平安時代前半の所産である堅穴住居址の覆土や基本土層から弥生時代後期～古墳時代前期、古墳時代後期、奈良時代、平安時代、中世に及ぶ広範な遺物が検出されるなど、調査区周辺に平安時代前半の集落址や中世の墓域のみならず、広範な時期の集落址や遺構が広がっている可能性が強く小唆される。今後周辺の調査があった際留意したい。

参考引用文献

- 小林健二ほか 1997 「大師東丹保遺跡Ⅱ・Ⅲ区」『山梨県埋蔵文化財センター調査報告書』第132集
- 小林健二ほか 2000 「石橋北屋敷遺跡」『山梨県埋蔵文化財センター調査報告書』第178集
- 舟藤秀樹 2003 「六科・村北遺跡」『八田村文化財報告書』第7集
- 清水 博 1998 「枇杷B遺跡」『柳町文化財調査報告書』第17集
- 田中大輔 1998 a 「角力場第2遺跡」『若草町埋蔵文化財調査報告書』第1集
- 田中大輔 1998 b 「清呂木道上第5遺跡」『若草町埋蔵文化財調査報告書』第2集
- 田中大輔 1999 「御崎藏入遺跡」『山梨考古』第74号 山梨県考古学協会
- 田中大輔 2001 「寺部村附第12遺跡」『山梨考古』第76号 山梨県考古学協会
- 田中大輔 2002 「向第1遺跡」『若草町埋蔵文化財調査報告書』第3集
- 田中大輔 2003 「清呂木道上第5遺跡(第II地点)」『若草町埋蔵文化財調査報告書』第4集
- 田中大輔 2003 「将監塚」『若草町埋蔵文化財調査報告書』第5集
- 中山誠二 2000 「二本柳遺跡」『山梨県埋蔵文化財センター調査報告書』第183集
- 新津 健ほか 1981 「住吉遺跡」甲西町教育委員会 郷土史読本第1集
- 新津 健ほか 1990 「大輪寺東遺跡」『山梨県埋蔵文化財センター調査報告書』第53集
- 新津 健ほか 1992 「二本柳遺跡」『山梨県埋蔵文化財センター調査報告書』第72集
- 新津 健ほか 1997 「大師東丹保遺跡Ⅰ区」『山梨県埋蔵文化財センター調査報告書』第131集
- 新津 健 2000 「宮沢中村遺跡」『山梨県埋蔵文化財センター調査報告書』第181集
- 野代幸和 2000 「山梨県における中世墓制の変遷」『山梨県考古学協会誌』第11号
- 廣瀬和弘 1997 「村内遺跡」甲西町教育委員会
- 降矢哲男・佐々木満・山下孝司 2001 「山梨県における中世の土器様相について—上師器皿を中心にして—」
『中世土器研究論集—中世上器研究会20周年記念論集—』
- 保坂和博 1997 「油田遺跡」『山梨県埋蔵文化財センター調査報告書』第130集
- 保坂和博 1997 「大師東丹保遺跡Ⅳ区」『山梨県埋蔵文化財センター調査報告書』第133集
- 保阪太一 2002 「豊小学校遺跡」『山梨考古』第87号 山梨県考古学協会
- 三井村美彦他 1999 「村前東八遺跡」『山梨県埋蔵文化財センター調査報告書』第157集
- 宮沢公雄 2001 「寺部村附第6遺跡」『山梨考古』第83集 山梨県考古学協会
- 森原明廣 1992 「羽釜」「甲斐型土器—その編年と年代—」山梨県考古学協会
- 山下大輔ほか 2000 「前原G遺跡」『柳町文化財調査報告書』第19集
- 山下孝司・瀬田正明 1999 「奈良・平安時代の編年」『山梨県史』資料編2
- 山梨県考古学協会編 1992 「甲斐型土器—その編年と年代—」
- 米田明訓 1991 「七ツ打C遺跡発掘調査報告書」『山梨県埋蔵文化財センター調査報告書』第60集
- 米田明訓 1997 「向河原遺跡」『山梨県埋蔵文化財センター調査報告書』第129集
- 米田明訓 1998 「新居道下遺跡」『山梨県埋蔵文化財センター調査報告書』第147集
- 米田明訓他 1999 「十五所遺跡」『山梨県埋蔵文化財センター調査報告書』第158集
- 若草町 1990 「若草町誌」

遺物番号	遺物 番号	種別	器種	計測値 (cm)			残存率	胎土	焼成	色調	調整等	備考
				口径	底径	高さ						
S 101	1	土器	皿	(12.2)	—	(2.7)	口縁部の 1/4	やや粗。赤色粒子、砂粒を含む。	良好	褐色		内外面焼成ナデ整形。 底部下半を割ヘラケス リ。
S 101	2	灰釉 陶器	碗	—	—	(3.6)	破片	緻密。砂粒等を と含有しない。	良好	灰色(胎はオリーブ灰 色。やや光沢に欠け る)		内外面共焼成ナデ整形。
S 101	3	灰釉 陶器	碗	—	—	(3.7)	破片	やや粗。砂粒、 黒色粒子を含む。	良好	灰白色(胎はオリーブ 灰色。光沢あり)		口縁部下に内 外面とも1条 の沈線が認め る。
S 101	4	土器	羽釜	(19.8)	—	(6.7)	口縁部の 1/5	粗。砂粒多く含む。 石英、金色 雲母多く含む。	良好	鋭い褐色～浅い黄褐色		内部焼成ナデ整形。 口縁部様ナデ、外底部 厚ハケ。
S 101	5	土器	甕	—	(8.0)	(5.1)	底盤の 1/4	やや粗。砂粒多 く含む。	良好	明赤褐色～墨褐色		内体部様ハケ、外底部 厚ハケ、底部木葉痕。
SK 01	1	土器	香炉	9.1	5.4	4.3	完形	やや粗。赤色 粒子、砂粒を含む。	良好	褐色		内外面焼成ナデ整形。 底部回転あ切り後脚3 点貼付。
SK 01	2	土器	皿	11.7	6.9	3.0	完形	やや粗。砂粒、 赤色粒子、金色 雲母含む。	良好	褐色		内外面焼成ナデ整形。 底部回転あ切り未調査。
SK 01	3	土器	皿	12.3	7.4	2.8	完形	やや粗。砂粒、 赤色粒子、金色 雲母含む。	良好	褐色		内外面焼成ナデ整形。 底部回転あ切り未調査。
SK 01	4	土器	皿	7.3	4.7	1.8	完形	やや粗。砂粒、 赤色粒子、金色 雲母含むG。	良好	鋭い橙色		内外面焼成ナデ整形。 底部回転あ切り未調査。 付箋
SK 01	5	土器	皿	7.1	3.9	2.1	完形	やや粗。砂粒、 赤色粒子、金色 雲母含む。	良好	鋭い褐色		内外面焼成ナデ整形。 底部回転あ切り未調査。
SK 01	6	土器	擂鉢	—	—	(4.2)	破片	緻密。微細な砂 粒を含む。	軟質	浅黃褐色～鋭い黄褐色		標目の単位は 3単位以上
SK 01	7	銘	銅鏡	(径) 2.4	—	(厚) 0.2	完形					元 背面無文
SK 01	8	銘	銅鏡	(径) 2.5	—	(厚) 0.2	完形					桙元 背面無文
SK 01	9	銘	銅鏡	(径) 2.4 5	—	(厚) 0.2	完形					開元 背面無文
SK 01	10	銘	銅鏡	(径) 2.4	—	(厚) 0.2	完形					元祐通寶？ 背面無文
SK 01	11	銘	銅鏡	(径) 2.6	—	(厚) 0.2	完形					天祐通寶？ 背面無文
SK 01	12	銘	銅鏡	(径) 2.6	—	(厚) 0.25	完形					開元通寶 片面に茎又は枝 状の圧痕有
SK 02	1	銘	銅鏡	(径) 2.5	—	(厚) 0.2	完形					永樂通寶
SK 02	2	銘	銅鏡	(径) 2.5	—	(厚) 0.2	完形					永樂通寶 背面無文
SK 02	3	銘	銅鏡	(径) 2.5	—	(厚) 0.2	完形					永樂通寶 背面無文
SK 02	4	銘	銅鏡	(径) 2.5	—	(厚) 0.2	完形					永樂通寶 背面無文
SK 02	5	銘	銅鏡	(径) 2.6	—	(厚) 0.2	完形					元祐通寶
SK 02	6	銘	銅鏡	(径) 2.6	—	(厚) 0.2	ほぼ完形					大觀通寶

第1表 出土遺物観察表



調査区全景（北より）



SI 01全景（西より）

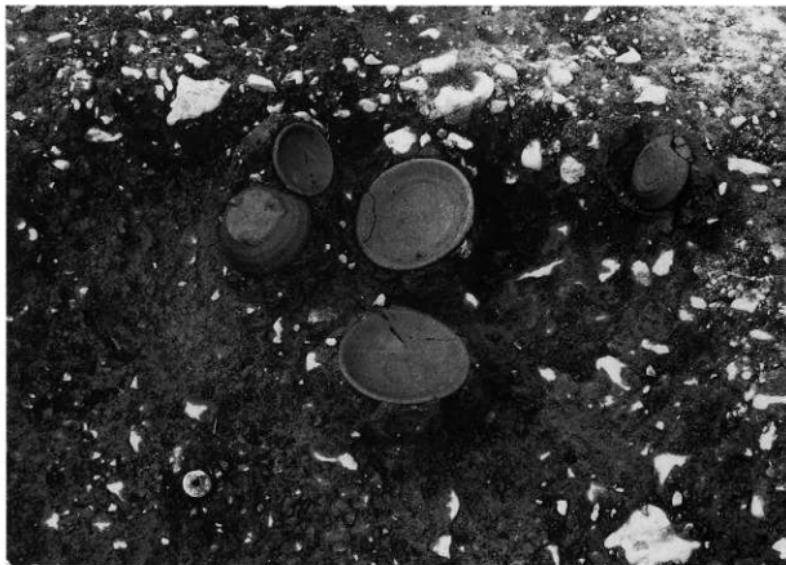
図版2



S101電(西より)



SK01全景(南より)

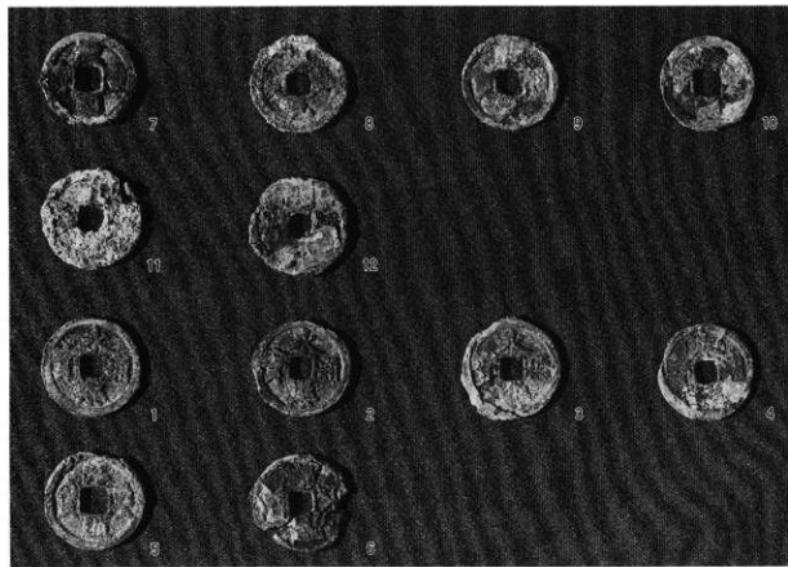


S K 0 1 遺物出土状況（南より）

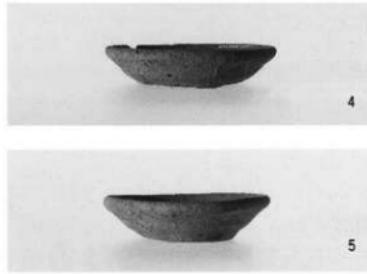


S K 0 2 全景（南より）

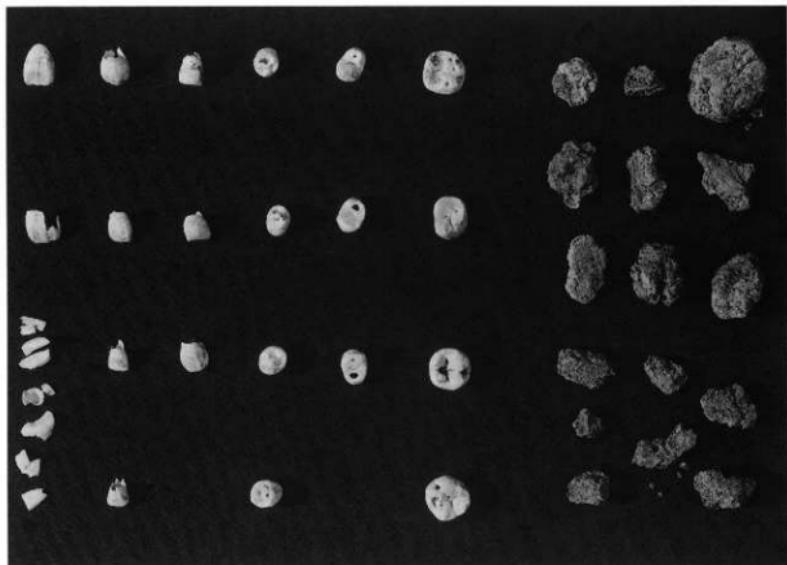
図版 4



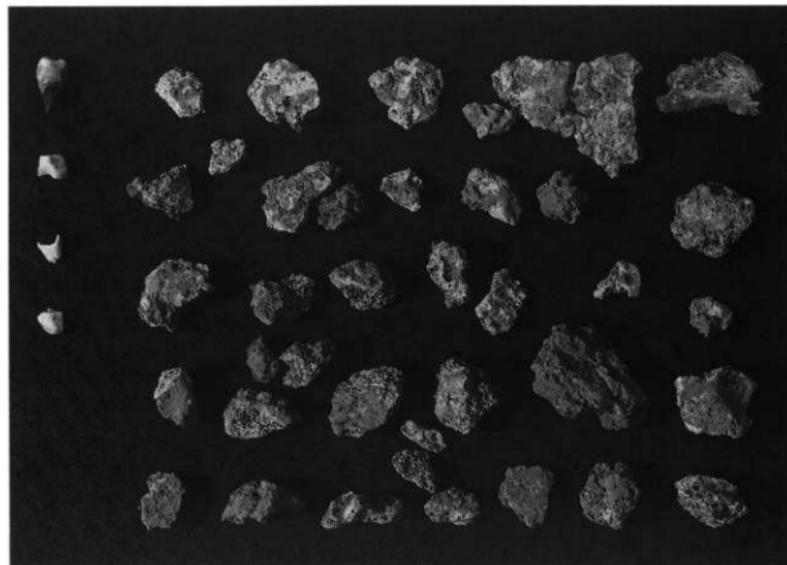
S K 0 1・S K 0 2 遺物（六道錢）



S K 0 1 出土遺物（土器）



S K 0 1 出土遺物（歯骨）



S K 0 2 出土遺物（歯骨）

報告書抄録

ふりがな	むらきただい2いせき
書名	村北第2遺跡
副書名	店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ	南アルプス市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第1集
編著者	田中大輔
編集機関	南アルプス市教育委員会
所在地	〒400-0492 山梨県南アルプス市鮎沢1212 TEL055-282-7777
発行年月日	西暦2004年3月15日
ふりがな	むらきただい2いせき
所収遺跡	村北第2遺跡
ふりがな	やまなしけんみなみあるぶすしかがみなかじょう64-1
所在地	山梨県南アルプス市鎌中条64-1
コード	市町村 19208 遺跡 WK-11 (南アルプス市遺跡番号) / 41011 (若草町旧遺跡番号)
1/25000地図名	小笠原
北緯	北緯 35° 37' 11" (Japanese Geodetic Datum2000)
東経	東経 138° 29' 43" (Japanese Geodetic Datum2000)
標高	270m
調査期間	20020909~20020926
調査面積	65.13m ²
調査原因	店舗建設 (ガソリンスタンド)
種別	散布地
主な時代	平安時代~中世
主な遺構	竪穴住居址1軒 (平安時代)・土坑墓2基 (中世)・土坑4基
主な遺物	土師器・土師質土器・灰釉陶器・銅錢 (六道錢)・人骨 (歯列)
特記事項	御勅使川扇状地末端の集落址・土坑墓群

発行日	2004年3月15日
発行者	南アルプス市教育委員会
	〒400-0492
	山梨県南アルプス市鮎沢1212
	TEL 055-282-7777
印刷	ほおづき書籍株
	〒381-0012
	長野県長野市柳原2133-5
	TEL 026-244-0235

